

発達障害の有無に関わらず、子どもを理解することは、誰もが、「わかる・できる」授業づくりには必要不可欠である。これまでも、下のような姿を本校の生活の中で見ている。

・従業中の姿勢が崩れやすい子 ・音読が苦手な子 ・板書を書き写すのに時間がかかる子
・文字が枠から大きくはみ出る子 ・注意してもおしゃべりをする子
・話が最後まで聞けない子 ・トラブルが多い子 ・友だちを興奮させるような子
・いらいらしているような子 ・わがままとしか思えない言動の子
・表情があまりない子

この時期、授業中や集団の中の様子などから、そろそろ気になる子どもや配慮の必要な子どもについては、特定されてきたのではないと思われる。「集中する時間が短い。」「友だちとうまく関われない。」「指示が入りにくい。」などの気付きもあろう。ここで、注意しなければならないことは、例えば、授業中の集中が続かない子への支援が、指示の繰り返しや注意・叱責に変わる恐れである。つまり、表面的な捉えが、そのまま表面的な支援になることである。決して、表面的な支援に終始しないほしい。

この授業中の集中が続かない子の姿が、注意や指示の繰り返しで改善傾向になればよいが、1学期中盤においても大きな変化がないどころか、悪化傾向になると授業者としては焦る。

では、どのようにすればよいか。

まず、日々の学習や生活の様子をしっかりと見取ること、観察することである。ただ見ているのではなく、意図をもって見る事が重要である。

例えば、どんな時に集中が続き、どんな時に続かないか、うまくできた場面とできない場面という点から観察をしたい。その際、どんな指示や声掛け、授業内容だったかをできるだけ洗い出し、困難さの原因を探りたい。

次は、集中が続かない複数の場面から、関連する原因を探るように観察する一方法である。教師は、「一生懸命に授業をしているのに」「こんなに大切な話をしているのに」「前を向くようにいつているのに」と思って授業を展開しているけれど、もしかすると子どもの側では、「話が長い」「話がくどい」「何を言っているか分からない」「興味や関心がわからない」などと思っているかもしれない。このように、多くのできない様子から、授業のどこに原因があるか、また、この子どものどこの原因があるか、共通の困難さを見出す努力が必要である。

つまり、どんなきっかけでどんな場面の時に、プラス行動が、また、マイナス行動が出るのか、仮説を立てることが、適切な支援を講ずる時には、重要となる。

(芝)



発達のつまずきから読み解く支援アプローチ
著者 川上康則 学苑社 P12のイラストから